

## JST、日印の高校生による オンライン交流プログラム

科学技術振興機構(JST)は1月27日及び2月1日の2日間にわたり、宮城県仙台第一高等学校とインドのJNVバンガロール高校の間で「オンライン高校生交流プログラム」を実施した。写真。

JSTは今年度、2年ぶりにさくらサイエンス・ハイスクールプログラム(SSHP)を小規模ながら再開したが、2020年度からの「オンライン高校生交流プログラム」も並行して開催している。これは、SSHの参加者から最も評価の高かった高校生交流の「オンライン版」。今回(第7回)は今年度2回目、2020年度から通算7回目の開催となった。

今回、宮城県仙台第一高等学校の生徒15名とインド教育省推薦のJNVバンガロール高校の15名が参加。「日本の生徒+ベトナムの生徒」の1グループ5名で全6グループに分かれ英語で交流した。参加に先立ち事前課題(個人ワーク・グループワーク)が生徒全員に課され、生徒は発表内容等をオンラインコミュニケーションツール「Padlet」に書き込んで、当日に臨んだ。



プログラム初日(1月27日)、生徒はグループに分かれて自己紹介を行い、自国に関するクイズを出し合った後、SDGsを意識して日頃行っている行動について発表。SDGsの問題意識を共有し、今後できる行動について議論を交わした。

プログラム二日目(2月1日)では、グループに分かれて生徒自身が想像する「2030年の自分」を披露し合った後、SDGsの3つのゴール(2飢餓、5ジェンダー、7エネルギー)から見た自国の社会課題を同じグループの相手国メンバーに向けて発表した。その後、発表をベースに同じグループの日印生徒が協力して日印の課題の共通点と相違点、そして課題解決のためのアクションをまとめ、それを全体で発表した。

両校とも全員が校内の募集に手を挙げた生徒だったこともあり、終始意欲的だった。どのグループでも日印生徒同士が助け合う場面が見られ、大変有意義な交流となった。

事後アンケートでは、日印の生徒からSDGsやグローバルな問題の理解に資するイベントだったとの声が多数寄せられた。また、「価値観と文化の違いを感じた」「外国の同年代と英語で話したり、協働作業をしたりする貴重な機会を得た」など、同プログラムの目的の異文化交流の魅力に触れたとの感想が目立った。さらには、「自国では取り組んでいないことを相手国の同世代が取り組んでいて、自分たちも実践しようと思った」という気づきを得た生徒もいた。

シリーズ最終回となる今回のイベントは、外務省2022年日本・南アジア交流年周年事業の認定の下で実施された。「オンライン高校生交流プログラム」の開催内容は、さくらサイエンスプログラムHPの特設ページで公開している。今年度実施分の第6回・7回は3月公開予定。